受験番号

広島市立看護専門学校　第一看護学科
令和五年度一般入学試験問題
「国　語」

【試験上の注意:答えはすべて解答用紙に記入すること】

一　次の文章を読んであとの問いに答えよ。

青空を見上げていて、ふと自分の存在の小ささ、儚さに気づくことがあります。道端の小さな石の存在にあるとき気づいて、この石ころと自分は何が違うのか、何も違わないのではと（a）愕然とすることもあります。

あるいは、星空を見上げて宇宙の広大さに飲み込まれそうになったり、砂浜に寄せる海の波に手を浸していると、身体全体が地球大に広がるようで怖くなったりもします。こうした経験はいったい何なのでしょうか。

I　大きさの宇宙や自然の（b）「崇高さ」の感情ともいえます。

そうはいっても、こうした語り口は、ありふれた言い回しで、特に真新しさはありません。「子どもの頃によく考えたなあ、分かるよ」といいながら、日常の細事に戻っていくのが大人の振る舞いです。

実際のところ、どれくらいの人がこうした経験をしているのかもよく分からないのですが、僕が出会う哲学科にくる学生には結構多い印象があります。心理学部にも、医学部にも、美学部にも少なからずこうした経験にとらわれている学生がいました。

もしこうした気づきがあまりに（c）頻繁に起こるようだと、日常生活が困難になります。A　学期始まりのガイダンスや講義では、「空の青さに突然気づいてしまうようなことは、年に数度起こってもいいけど、一週間に何度も起こる場合はぜひ相談してください」と伝えたりもしています。

B　他方で、この自分の卑小さと宇宙の広大さから沸き起こる経験について、これがいったい何であるのか、しかも絶対的な一瞬の驚異であり、畏怖でもあるこの経験を、人間の生き方にどのように活用できるのかをずっと考えてもきました。

バタイユという哲学者（彼は自分を非哲学者といっていますが……）がいます。彼であれば、こうした経験を「至高性（sovereignty）」と呼ぶかもしれません。人はそこで至高なものに立ち会っているのだと。

彼がいうにはそれは、「不可能なことが起きてしまっている」という体験です。なにか起きてはいけないことに立ち会ってしまう　II　瞬間です。彼はこれを「非知」とも名づけていました。つまり、本来は思考や言語で把捉できるものではありません。身体全体で感じ取るものです。

はっきりいって、こんな感覚に日々襲われていたら、日常生活がままなりませんし、端的に邪魔です。にもかかわらず、（1）この不可能なこと、起こってはいけないことが、逆説的ではありますが、僕たち

人間にはまぎれもなく起こるのです。

バタイユはこの「至高性」は、社会や未来に（2）隷従させられている人間を解放するてがかりとなる経験だとも述べていました。本書は、この「至高性」という概念と経験を導きの糸に、人間の現在地と、そこから前に進む新しい［Ⅲ］を引き出していけないかと考えています。

そもそも冒頭で述べた「自然・宇宙」とは、どのようなものでしょうか。それの何が僕たちにとっての［a］なのでしょうか。

青々と芽吹いている安らかで豊かな自然、そうしたものとは決定的に異なっています。小川のせせらぎや陽光のやわらかさといった「セラピー的自然」が問題になっているのではどうもなさそうです（後述しますが、それは人間が切り取った［Ⅳ］に構築された自然です）。

［C］崇高さとともに立ち現れる宇宙や自然は、人間とは無関係で、生命を育むこともなく、（d）豊饒さも与えない、暗渠のような存在です。（3）そもそも宇宙は、非人間的です。膨大な物量をもつ物質／反物質の運動であり、数十億年という時間スパンをまったく意に介さずにうごめき、存在し続けているものです。先ほどのバタイユは、「爆発しつつある物質の渦」とも述べていました。

フェルミのパラドクスと呼ばれるものがあります。これは、物理学者のフェルミが昼食の会話の中で「宇宙はこれだけ広く、地球外生命がいてもおかしくないのに、どうして誰も僕たちに接触してこないのか、彼らはどこにいるのだろう」と述べたというものです。宇宙はどうしてこんなに静かなのか。宇宙戦争など起きる気配もありません。

この問いに対して推論や仮説をこねくり回すことはできます。しかしそれでも、宇宙が今のところ「大いなる静けさ」に包まれているのはたしかです。宇宙には［V］もありません。

地球が公転する太陽系が位置するのは、天の川銀河の端に近いところですが、この銀河の大きさは直径十万光年ほどといわれています。そしてこの天の川銀河は、毎秒２５０キロメートル（東京から札幌までおよそ４秒でたどり着く速度ですね）で宇宙空間を回転していて、２億年かけて一周するようです。

一つ前の周回時、この地球を（e）席巻していたのは恐竜でした。そして恐竜がすべて絶滅した後、今は人間が地球上に溢れています。

［D］、天の川銀河の次の周回時に、地球上を席巻している生命は何でしょうか。恐竜の時代には、次の主役が人間になるとは誰も予想できなかったと思います。

そもそも地球上にどんな生命もいないまま周回してきたのが天の川銀河のこれまでした。だとしたら次回の周回時には全生命は絶滅し、また元のままの地球に戻っている可能性もあります。大いなる静けさによる制圧です。

こうした事例から理解される「自然・宇宙」は、（4）徹頭徹尾、僕たちの生活や生き方とは無関係で、無慈悲です。どんな恨みも、祈りも絶対に届かないし、響くこともありません。これは、自然科学が明らかにする揺らぐことのない実証的な事実です。

また現代は、１万５千年前くらいから、「完新世絶滅期（Holocene extinction）」、あるいは第六次の大絶滅期ではないかといわれています。これまでも地球では、五回の大量絶滅期がありました。その定義とは「生物種の75パーセント以上が、地質学的には短い間隔（通常は２００万年未満、場合によってはそれよりはるかに短いうち）で消滅するよう絶滅率が発生率を上回り加速すること」です。

2億5千万年前のペルム紀大絶滅では、10万年間という地質学的には超短期間に、すべての生物種の95パーセント近くが巨大火山の噴火で絶滅しました。95パーセントです。

7万4000年前には、インドネシアのトバ火山が大噴火し、人類の人口が1万人から3000人になったともいわれています（トバ・カタストロフ）。

それらに対して現代の［β］は、小規模の氷河期と人間とテクノロジーによる乱獲や環境破壊の影響が大きく、ここで僕たちは直接的に「現生人類の絶滅」の可能性も考えざるをえなくなります。

いつでも人類は、ちょっとした天変地異で吹き飛ばされてしまうような崖っぷちにいるようなものです。

しかも僕たちは、そうした科学の［Ⅵ］がなくても、宇宙や自然がそのようなものであることに、あの「至高性」を通じて気づいてしまいます。そしてそこから目を逸らします（大人の振る舞いです）。

それでもある瞬間、日々の生活からむりやり引き剥がされるようにこの感覚に襲われることがあります。そこに努力は必要ありません。むしろ努力して得ようとすればするほどそこから遠ざかるものです。ほとんどの動物は、空の青さに驚いたりすることはないでしょうから、(5) この感覚をもてることは人間の固有性のひとつなのかもしれません。

（出典：稲垣諭『絶滅へようこそ　「終わり」からはじめる哲学入門』晶文社・二〇二二、出題の都合上フォントを変えたり、改行を省略したところがある）

問一　波線部（a）～（e）の語の読みを記せ。

問二　空欄［Ⅰ］～［Ⅵ］に入れるのに最も適当な語を、次の（ア）～（エ）の中からそれぞれ一つ選んで符号で書け。

空欄［Ⅰ］　（ア）統制的な　（イ）威圧的な　（ウ）絶対的な　（エ）圧倒的な

空欄［Ⅱ］　（ア）奇跡的な　（イ）鮮烈な　（ウ）刹那的な　（エ）飛躍的な

空欄［Ⅲ］　（ア）人間存在　（イ）経験　（ウ）感情　（エ）宇宙

空欄［Ⅳ］　（ア）表面的　（イ）中立的　（ウ）一面的　（エ）想像的

空欄［Ⅴ］　（ア）生命　（イ）絶滅　（ウ）音　（エ）自然

空欄［Ⅵ］　（ア）知識　（イ）経験　（ウ）極意　（エ）手法

問三　空欄［A］～［D］を補うのに最も適当な語を、次の（ア）～（オ）の中からそれぞれ一つ選んで符号で書け。

（ア）むしろ　（イ）だから　（ウ）そして　（エ）では　（オ）しかし

問四　傍線部（1）「この不可能なこと、起こってはいけないことが、逆説的ではありますが、僕たち人間にはまぎれもなく起こるのです」とあるが、それはどういうことか。簡潔に説明せよ。

問五　空欄［α］［β］に入る言葉を、それぞれ本文中から抜き出せ。

問六　傍線部（2）「隷従」、（4）「徹頭徹尾」の意味として適当なものを、次の（ア）～（エ）の中からそれぞれ一つ選んで符号で書け。

傍線部（2）（ア）引きずりまわされること　（イ）他の支配を受け、いいなりになること

（ウ）権力者になびくこと　（エ）考えなしに盲従すること

傍線部（4）（ア）十分に足りている　（イ）徹底的に
（ウ）いつまでも　（エ）最初から最後まで

問七　傍線部（3）「そもそも宇宙は、非人間的です」とあるが、それはどういうことか。簡潔に説明せよ。

問八　傍線部（5）「この感覚をもてることは人間の固有性のひとつなのかもしれません」とあるが、それはどういうことか。簡潔に説明せよ。

二　次の文章にある傍線部のカタカナ表記を、漢字に改めよ。

ガラスに当たる日光の角度が変わって、店内全体がふいに奥まではっきり見えた。若い女性が一人、①アシブみミシンをフんでいる。こちらに半分背中を向け、うつむきかげんで作業している。髪を結い上げているので、襟なしブラウスの黒い絹のすぐ下で、うなじが明るく輝いている。両手を焚き火にかざすようにして細い布をミシンの針の下に送り込んでいる。②ボウシにつけるリボンを縫っているのだろうか。時間が縫い目に吸い取られていく。この店で売られているボウシは工場で大量生産されているわけではなく、人の手でつくられているのだろうということは③ヨウイに想像できる。手芸を趣味にしている人のつくった作品には時に「わたしがつくったんです」という自己愛の押し売りや媚びるようなぎこちなさが感じられるため、手作りの店というのが少し苦手なわたしをも惹きつける④ブアイソウな雰囲気がミシンをフむ女性の肩のあたりに漂っている。どのボウシも完成品として作者を冷たく突き放し、この先百年、品質で勝負するぞという自信に満ちている。

ボウシの値段は労働の値段なのだ。それを言うために、わざわざ商品の⑤ハイゴに労働が見えるように店内がつくられているのだろう。寿司屋のカウンター席なら寿司を握っている職人の姿が見えても驚かないが、本屋の奥で作家が小説を書いていたらどんなものだろうと思った途端、ガラスに軽く鼻をぶつけて、あわてて身を引いた。

（出典：多和田葉子『百年の散歩』新潮文庫・二〇二〇、出題の都合上カタカナ表記に変えたところがある）